

中華書局創立までの陸費達

沢本 郁馬

商務印書院と並び称される中華書局を創立した陸費達の経歴については、私にとって依然として不明の個所ばかりだ。

「18歳の時武昌で教師をした経験があり、昌明会社の上海支店の支配人、文明書局で2年弱、商務印書館で3年強仕事をしている」(沢本郁馬「商務印書館と夏瑞芳」『清末小説研究』第4号1980. 12. 1, 121頁)と書いたその根拠は、わずかに陸費達自身の筆になる「六十年来中国之出版業与印刷業」(『申報月刊』創刊号1932. 7. 15, 13頁。同文は張静廬輯註『中国出版史料補編』中華書局1957. 5に収録される)のみであった。

ひとつは陸費達にまで手をのばす余裕がなかったことと、ふたつに彼の姓名についての思い違いがあって調査が進まなかったのだ。

それにしても、調査不十分のまま「詳細がわからない」と書いたところなどわれながら大胆であったとあきれかえる。後に気のついた二、三の資料をもとにもう少し陸費達のことを述べてみる。

まずはじめに、陸費達が陸費という複姓であったとは知らなかった。陸姓は一般によくみかけるので、姓は陸とばかり思い込んでいた。恥かしいことです。

陸費が姓で、達は名、字が伯鴻である。

ただ、弁解をするなら陸姓と思われているこの誤りは、わりと一般的だ。たとえば、

橋川時雄『中国文化界人物総鑑』(中華法令編印館1940. 10. 25)では陸姓に分類し、陸費という別項目を立てていない。

藤田正典『現代中国人物表』(大安1969. 5. 25)にも陸の項に収め、ローマ字索引に Lu Fei-kuei と綴る。

“WHO'S WHO IN CHINA”4版(The China Weekly Review, Shanghai, 1931? 竜溪書舎影印本第3巻 1973. 11. 30)は Lo Fei-kwei (Lu Fei-kui) と記し、これまた間違えている。

私などが誤ったとしても何の不思議もない(?!)

しかし、さすがにといおうか“WHO'S WHO IN CHINA”5版(1936? 竜溪書舎影印本第4巻)では Lofei Kwei (Lufei Kuei) と訂正しているし、また、A. W. HUMMEL “EMINENT CHINESE of the CH'ING PERIOD” (1943, 台湾成文出版社影印本1972による)には Lu-fei K'uei と正しく記している。

字が伯鴻であって、陸を姓と考えていた私が、陸伯鴻の名前を『民国以来人名字号別名索引』(東洋学文献センター叢刊第26輯1977. 2. 10)に見い出し、大喜びで“BIOGRAPHICAL DICTIONARY OF REPUBLICAN CHINA”を検索するやまたくの別人であってガッカリしたのも、今から考えれば当然のことであった。

お互いに補う個所があるのでいくつかの文献を資料集風に、内容の簡明な順にならべる。

●藤田正典『現代中国人物表』

〔氏名〕陸費逵〔生没年(歳)〕1886.8～1941.7.9〔出身地〕浙江・嘉興〔別称〕字伯鴻，号少滄〔備考〕ジャーナリスト(〈楚報〉記者，〈教育雑誌〉編集長，中華書局創弁など)〔典拠〕略

●橋川時雄『中国文化界人物総鑑』

陸費逵 未詳—X 字は伯鴻，安徽桐鄉の人。彼れの父は陝西漢中府の官吏であったので彼れは漢中に生れた。幼く母教をうけ向学の心に篤く，民国初年に上海南洋公学を卒業し，其の後友人相謀つて中華書局を組織し自ら經理兼編訳所所長となつた。其の著に「世界教育状況」，(宣統三年商務印書館出版)，「教育文存」五卷，(民国十一年中華書局出版)「婦女問題雜談」，(十六年，同上)「中華大辞典」(五年，同上)など。

●“WHO'S WHO IN CHINA” (中国名人録) 4版 (5版は姓名のローマ字書きを訂正するのみで内容は4版と同じ。原文は英文)

LO FEI-KWEI 教育家，出版家。1887年浙江省 Tien Hsien に生まれる。中国風の教育を家庭で完成したのち，実業界に進み，武昌で書店を始め同時に楚報(革命思想を宣伝するための新聞)の編集者となる。湖広総督張之洞によって同紙が停刊されると上海に出て教育関係の仕事に興味を持つ。昌明公司(注：原文は Chang Ming Book Co. で書店であるらしい)上海支店の支配人を勤め，後に文明書局および商務印書館に参加した。しばらくの間『教育雑誌』の

編集長でもあったが，1912年中華民国成立後，彼は当時の教育総長蔡元培によって是認され提倡された近代的教育システムを計画した。上海に中華書局を創立し，以後総支配人をつとめている。住所，上海福州路中華書局。

まさに断片としか言いようがなく，じれったく思っていたところに近代中国史料叢刊第90輯総 899 編の鄭子展編『陸費伯鴻先生年譜』(台北文海出版社1973)を見ることができた。

珍らしい本なのだが，ほとんど読めない。というのは，私家版で少部数印刷されたものか原本は謄写版印本(ガリ版本)でもともと印刷が鮮明でないところに，印刷所のオフセット印刷の技術が高くなく印字がにじんでしまっている。私の語学力では3～4割くらいしか判読出来ない。

読めないところをむりやりこじつけて，陸費逵が中華書局を創立するまでの軌跡をたどるところなる。

姓は陸費，名は逵，字を伯鴻という。原籍，浙江省嘉興。

光緒十二年八月二十日(1886.9.17)，陝西省漢中府に生まれる。十三歳まで父母について家庭で学習をする。

光緒二十五年(1899)，十四歳。正月より王月起先生に従って自修。この頃より文学者，新聞社主筆になろうと考える。

光緒二十七年(1901)，十六歳。数学に熱中し科学者になることを夢みる。

光緒二十八年(1902)，十七歳。教育書を読み教育家をもって自認し，友人数人と小学校・正蒙学堂を開設。秋，日本語を学ぶ。

光緒二十九年（1903），十八歳。武昌に行く。

光緒三十年（1904），十九歳。日本語を学んでいた友人数人と1500元を集め武昌で新学界書店を開設，支配人となる。小説『岳武穆伝』『恨海花』を書く。

光緒三十一年（1905），二十歳。秋，漢口『楚報』主筆となる。『楚報』は粵漢鉄道に関する暴露記事を掲載したため圧力を受け停刊となる。在任3ヵ月の冬，上海へ行く。昌明公司上海支店の支配人となる。

光緒三十二年（1906），二十一歳。冬，文明書局に移り編集を担当。また，文明小学校校長を兼務する。

光緒三十三年（1907），二十二歳。教育と経済の研究に力を入れる一方，文明書局の叢書，丁宝書らと小学校の教科書を編集する。

光緒三十四年（1908），二十三歳。文明書局に勤めながら商務印書館に入る。

宣統元年（1909），二十四歳。商務印書館出版部長兼交通部長，『教育雑誌』主編。

宣統二年（1910），二十五歳。高夫人と結婚。

宣統三年（1911），二十六歳。武昌起義。2500元を集め中華書局を設立（民国元年一月一日）。

文学者，新聞社主筆，科学者，教育者等，少年の頃夢みる事も多かったが，実際，成長してからそれらの多くが実現されていることにまずおどろく。

日本語を学んでいたこと，それもかなりの程度話せたらしい。彼が日本語を学習していたことを初めて知った。と同時に，日本の金港堂と関係のあった時代の商務印書館に勤務して，その日本語の能力が『教育

雑誌』等の編集に生かされたのではないかと想像したくなる。

光緒三十一年（1905），陸費達が「漢口『楚報』主筆となる」という個所は興味深い。『楚報』は呉趼人が主筆をしていた新聞であるからだ。

魏紹昌によると，「1905年春，趼人は招聘を受け漢口に行く」とアメリカ人経営の英文紙《楚報》Central China Post が新しく出す中国語版の編集を担当した。これは呉趼人2度目の漢口における新聞編集である。五月になり反美華工禁約運動が全国的規模で強烈に展開されると，趼人は愛国の義憤にかられ毅然として職を辞し上海にもどった」（魏紹昌『呉趼人研究資料』上海古籍出版社1980.4, 6頁。以下『資料』と略す）という。

呉趼人が漢口で編集した最初の新聞というのは、『漢口日報』である。『楚報』に招かれる3年以前の1902年春のことだった（紫英「新彙諸訳』『月月小説』第5号1907年正月，238頁。『資料』4，336頁）。

この『漢口日報』というのがいわく因縁ありなのだ。

『漢口日報』の前身は『漢報』という。『漢報』については，詳細な論文・中下正治「漢報と宗方小太郎」（『季刊現代中国』6，1973. 6. 20，28—40頁）を見てもらうことにして，ここでは同氏の執筆になる「中国における日本人経営の雑誌・新聞史その1」（『アジア経済資料月報』1977年7月号1977. 7. 20）の，より簡潔な記述から引用させてもらう。

漢報	
発行地	漢口（湖北省）
使用語	中国語

刊行間隔 日刊
 創刊年月 1896年2月12日(明治29年)
 代表者(持主) 宗方小太郎
 編集幹部 主筆・彭守静・岡幸七郎
 備考

1890・91年ごろ、イギリス人によって創刊されたが、1年あまりで廃刊。1893年夏、姚文藻が再興し、林松塘に貸与して発行させていたが、経営不振のため1000円で宗方小太郎が購入(資金は佐々友房・西郷従道・樺山資紀らが援助)して、1896年2月12日再刊した。しかし、1900年8月の自立軍起義事件(変法派の唐才常が哥老会とともに漢口で蜂起を企て、事前に漏れて湖広総督張之洞に唐才常・甲斐靖らが8月21日に逮捕された事件。唐は8月22日処刑されている。なお東亞同文会上海支部は唐の運動に直接助力をおこない、漢報社も唐の連絡所として使用された)のため、張之洞の圧迫を受けて経営不能におちいり、1900年9月30日、銀3000両で張之洞へ譲渡した。なお、瀬川浅之進漢口領事は本紙について「蓋シ日本人ガ清国内ニ在リテ漢字新聞ヲ発兌セルハ之ヲ以テ嚙矢ト為ス」と西徳三郎駐清公使へ書いている。／「漢報」を買取った張之洞は、これを「漢口日報」と改称して、「湖北官報」とともに官営として日刊にしていたが、1906年10月24日、失火のため印刷機を焼失したので「漢口日報」も停刊したまま終わった。

イギリス人が創刊(1890・91)して、まもなく廃刊。それを中国人が再興(1893)するも、経営不振で日本人が購入(1896)。自立軍起義事件に関連して張之洞の圧迫を受ける。経営不能となり張之洞に売却され(1900)、紙名を『漢口日報』と変更する。

『漢報』から『漢口日報』へと、めまぐるしいほどの転変である。その間、わずかに10年だ。

一方、『楚報』はというと、もともと英字新聞 Central China Post として1904年漢口で創刊された。呉趼人が1905年招聘されたのも、魏紹昌が書いているように中国語版を編集するためであったのだろう(ただし、魏がどういう資料によったのか不明)。呉が反美華工禁約運動(アメリカにおける中国人労働者排斥法に反対する運動)に共鳴し『楚報』を辞職したのが1905年五月。陸費逵が同紙の「主筆とな」ったのは同年秋である。陸費と呉は、まさに「すれちがった」ということになろうか。

ただ、ここで疑問を述べておくと、はたして陸費は主筆であったのだろうか。1905年冬、『楚報』は清朝政府が粵漢鉄道を借款によって建設することを暴露したため停刊処分を受け、主筆張漢傑が禁固10年の刑に処せられたという記述があるのに注目しなければならない(戈公振『中国報学史』影印本による。171頁。また、曾虚白主編『中国新聞史』227頁)。

たしかに、主筆であれば処罰をまぬかれぬ。陸費逵は何の罪も受けず上海に出ているのだから、彼が『楚報』の主筆であったとは認めがたいのだ。藤田『現代中国人物表』に記す「〈楚報〉記者」あたりが妥当ではないか。

『楚報』停刊に張之洞がからんでいるらしく、『漢口日報』のオーナーも同じ張之洞自身だし、ここらあたりの事情を詳しく知りたい。

ますます深まる謎またナゾ、というわけでもう少し勉強を続けます。

(さわもと いくま)